

哲学を新たに考える

P.8 ⇒この人生、この宇宙、そのほかすべて……これはそもそも何なのだろうと、誰でもこれまでにたびたび自問したことがあるかと思います。私たちはどこに存在しているのでしょうか。

⇒本書では新しい哲学の原則を示して見せたいと思っています。この哲学の基本思想は、ごく単純なものです。

すなわち、世界は存在しない、ということです。

⇒世界は存在しない、という原則には、それ以外のものはすべて存在しているということが含意されているわけです。……私の主張によれば、あらゆるものが存在することになる——ただし世界は別である、と。

⇒本書の第二の基本思想は、新しい実在論です。ここでいう「新しい実在論」は、いわゆる「ポストモダン」以降の時代を特徴づける哲学的立場を表しています。……さしあたりは、「新しい実在論」は、押すとモダン以降の時代を表す名称だ、といった程度に受取っておいてくだされば結構です。

P.9 ⇒ポストモダンは、人類救済の壮大な約束——宗教から近代科学を経て、左右両翼にわたる全体主義のあまりに急進的な政治理念に到るまで——のすべてが反故になってしまった後で、徹底的に始めからやり直す試みでした。

⇒私たちのだれもが追求すべき何らかの意味がこの人生にはあるのだという幻想から、私たちを解放しようとしたのでした。

⇒ところが、そのような幻想からわたしたちを解放するためにポストモダンがしたのは、実際には新しい幻想を生み出すことにすぎませんでした。私たちは個々自らの幻想にいわばはまり込んでしまっているのだという幻想を生み出しました。ポストモダンは、私たちにこう信じ込ませようとしたわけです。前史時代からずっと人類は巨大な集団幻覚の虜になっているのだ、と。そして形而上学こそが、その巨大な集団幻覚だとされました。

仮像と存在

P.9 ⇒形而上学は、この世界全体についての理論を展開しようとする試みであると定義できます。形而上学が説明すべきことは、現実に世界がどのように存在しているのかであって、私たちにとって世界がどのようにみえるのか、私たちに対して世界がどのように現れるのかではありません。このような問いの立て方によって、形而上学は、いわば世界を発明したのでした。わたしたちが「世界」という言葉を用いるさい、この言葉によって考えられているのは、現実に成立していることからの総体、言い換えれば、この現実それ自体です。そのさい明らかなのは、この「世界＝現実に成立していることからの総体」という等式から、わたしたち人間が抹消されているということです。ここでは、わたしたちに対して表れている限りでの事物と、現実に存在しているそれ自体との間に区別があることが、じっさい暗に想定されているからです。となると、現実に事物がどのように存在しているのかを確かめるには、いわば認識のプロセスに人間がくわえた作為のいっさいを取り除かなければならないこととなります。そして、わたしたちは哲学に膝まで浸かってしまっているわけです。

P.10⇒それに対してポストモダンは、わたしたちに対して現れている限りでの事物だけが存在するのだと異議を申し立てました。現れの背後には、それ以上のものすなわち世界ないし現実そのものなど存在しない、というわけである。……このようなポストモダンは、実のところ形而上学の派生形態の一つにすぎません。厳密に言えば、ポストモダンで問題になったのは、相当に一般化された構築主義にほかなりませんでした。

P.11 構築主義とは、次のような想定に基づくものです。およそ事実それ自体など存在しない。むしろわたしたちが、わたしたち自身の重層的な言説ないし科学的方法を通じて、いっさいの事実を構築しているのだ、と。このような思想の伝統の最も重要な証言者が、イマヌエル・カントです。カントが主張したのは、それ自体として存在しているような世界は、わたしたちには認識できない、

ということでした。わたしたちが何を認識するのであれ、およそ認識されるものはなんらかの仕方  
で人間の作為を加えられているほかない、というわけです。

P.11⇒色彩は現実には存在していないのではないかと疑われてきました。・・・ゲーテは独自の『色彩論』・・・

P.12⇒緑色の眼鏡の例

P.12⇒構築主義は、カントの「緑の眼鏡」を信じているわけです。これに加えてポストモダンも、わたしたちがかけている眼鏡はひとつにとどまらず、とても数多くあるのだとしました。科学、政治、恋愛や文学などの言語ゲーム、多様な自然言語、様々な社会習慣、等々。いっさいは様々な幻想をもてあそぶ複雑な戯れにすぎず、その中でわたしたちは世界内での位置をたがいに割り当てあっているのだ、と。もっと簡単に言ってみれば、ポストモダンにとって人間の存在とは、一本の長いフランス芸術映画のようなものにほかなりません。

P.13⇒人間の存在と認識は集団幻覚ではありませんし、わたしたちが何らかのイメージ世界ないし概念システムに嵌まり込んでいて、その背後に現実の世界があるというわけではありません。むしろ新しい実在論の出発点となるのは、それ自体として存在しているような世界をわたしたちは認識しているのだ、ということです。もちろん、わたしたちは錯覚にとらわれることがありえますし、場合によっては幻覚の中にあることがあるでしょう。だからといって、わたしたちがつねに一あるいは、必ずつねにというわけではなくとも、ほとんどつねに一錯覚にとらわれているとするのは、たんに間違っているほかはありません。

新しい実在論

P.13⇒ヴェズーヴィオ山の形而上学的対象・構築主義としての対象

P.14⇒これらに対して新しい実在論の想定によれば、このシナリオには、少なくとも以下の四つの対象が存在しています。

1 ヴェズーヴィオ山

2 ソレントから見られているヴェズーヴィオ山 (アスリートさんのパースペクティブ)

3 ナポリから見られているヴェズーヴィオ山 (あなたの視点)

4 ナポリから見られているヴェズーヴィオ山 (わたしの視点)

P.15⇒なぜ新しい実在論が最良の選択肢なのかは、簡単に理解できます。・・・こうして新しい実在論が想定するのは、わたしたちの試行対象となる様々な事実が現実中存在しているのはもちろん、それと同じ権利で、それらの事実についてのわたしたちの思考も現実中存在している、ということなのです。

これに対して形而上学と構築主義は、いずれもうまくいきません。形而上学は現実を観察者のない世界として一面的に解した構築主義は現実を観察者にとってだけの世界として同じく一面的に解することで、いずれも根拠なしに現実を単純出しているからです。ところが、わたしの知っている世界は、常に観察者のいる世界です。このような世界のなかで、必ずしも私には関係のないさまざまな事実が、わたしの抱く様々な関心 (および知覚、感覚、等々) と並んで存在している。この世界は、観察者のいない世界でしかありえないわけではないし、観察者にとってだけの世界でしかありえないわけでもない。これがあたらしい実在論です。・・・

P.16⇒このようなわけで、

世界は数多くある

P.18⇒宇宙はごく特殊な限定領域にすぎません。

⇒世界を有意味に定義しようとするれば、全てを包摂する領域、全ての領域の領域とするほかはありません。・・・世界とは、なんとと言ってもすべてを——この人生、この宇宙、そのほかすべてを——包摂する領域だからです。・・・この主要テーゼによって人類が頑なにしがみついている「世界は存在する」という幻想が打ち壊されるだけではありません。それと同時に、わたしとしては、この幻想をうまく利用して、そこからポジティブな認識を獲得したいとも思っています。つまりわたしは、世界は存在しないということだけでなく、世界以外のすべては存在するということも主張したいわけです。

無以下

P.23⇒なぜ世界が存在しないのかを理解するためには、何かが存在するとはそもそも何を意味するのかをまず理解しておかなければなりません。そして、およそ何かが存在するといえるのは、その何かが世界のなかに現れるときだけです。・・・したがって一方で、わたしの主張は、世界が存在しないのだから、その分だけ、存在する者は一般に期待されているよりも少ない、ということです。・・・ここからいろいろと重要な結論を導き出すこととなりますが、それらの結論は、とりわけ今日の社会政策やメディアによって流布しているかたちでの科学的世界像に異議を申し立てるものになるでしょう。・・・一角獣でさえ存在する、・・・では、一見すると存在しないかに思われるほかの事物はどうでしょうか。妖精、魔女、ルクセンブルグに隠された大量殺戮兵器などはどうでしょうか。これらのものも、確かに世界のなかに——たとえばメルヒェン、妄想、精神病のなかに——現れています。わたしの答えはこうです。存在しないものも、すべて存在している。・・・ここでも唯一の例外は、やはり世界です。世界それ自体なるものは、どうしても想像することができません。わたしたちが世界の存在を信じている時に想像しているものは、反逆的なスター哲学者スラブォイ・ジジエクの本のタイトルが言うように、いわば「無以下」のものなのです。・・・ルートヴィヒ・フットゲンシュタインは、かつてこう言いました。「およそ語りうることは、明晰に語るができる」・・・わたしたちはどこから来たのか。わたしたちはどこに存在しているのか。そもそもこの世界全体とは何なのか。・・・

I これはそもそも何なのか、この世界とは？

※ホログラム

あなたと宇宙

P.37⇒まずはいったん二つの概念を区別しておかなければなりません。今日ではすっかり混乱して用いられている二つの概念、すなわち「世界」と「宇宙」です。

P.37⇒従って今と惑星は、けっして同じ対象領域には属していません。

P.39⇒対象領域とは、特定の種類の諸対象を包摂する領域のことです。そのさいには、それらの対象を関係づける規則が定まっていなければなりません。たとえば、政治という対象領域があります。この対象領域には、有権者、地域のお祭り行事、いわゆる一般党员、税金、そのほか多くのものが属しています。・・・

P.40⇒第一に、どんな対象もなんらかの対象領域に現れてきます。第二に、対象領域は数多く存在しています。

⇒このように数多くの対象領域が存在しますが、日常的には、わたしたちは何の造作もなく対象領域を区別することができます

P.45⇒宇宙の中に今のありかを位置づけるとき、わたしたちは、全く気付かぬままに、ある対象領域から別の領域へ移行しています。

P.46⇒先に進む前にちょっと立ち止まって、すぐに思い浮かぶ反論を見ておくのがよいでしょう。その反論によれば、・・・

唯物論

P.47⇒ここで大切なのは、物理学主義と唯物論を区別しておくことです。物理学主義とは、現実に存在するすべてのものが宇宙のなかにあること、したがって物理学によって研究されうることを主張するものです。これに対して唯物論とは、現実に存在するすべてのものが物質的であることを主張するものです。

P.49⇒唯物論の第一の問題は同定の問題です。唯物論の説くところによれば、・・・

P.50⇒唯物論の第二の問題は、唯物論にとってほとんど破壊的なものです。それは、唯物論それ自体が物質的でないことにあります。・・・

P.51⇒・・・いずれの理論も、かなり重大な間違いを犯しています。つまり、ある特定の対象領域を世界全体と取り違えているのです。・・・

「世界とは、成立していることがらの総体である」

P.51⇒ですから、宇宙と世界を区別しなければなりません。

P.52⇒ヴィトゲンシュタインは『論理哲学論考』の第一テーゼ群でこう書いています。

1 世界とは、成立していることがらの総体である。

1-1 世界は事実の総体であって、物の総体ではない

ここで言われていることは、次のように説明することができます。まず、よく知っているありふれた者、リンゴを例にしましょう。リンゴが果物鉢に盛られているとします。そして、およそ世界にはこのリンゴと果物鉢と、両者の占めている空間とだけが存在するものと想定しましょう。この事例では、世界は、以下の三つのものの総体に等しいと考えることができます。

1 リンゴ

2 果物鉢

3 両者の占めている空間

世界は、もしリンゴが果物鉢より大きかったとしたら、あるいはりんごがくだもの鉢に盛られていなかったとしたら、ここで想定している世界ではありません。ここで想定している世界は、じつさい果物鉢に盛られたリンゴから成り立っているからです。こうして物それ自体と並んで、物の相互関係に関わる事実も存在しているわけです。事実とは、何かについて「真である」と言える何らかのことで、たとえば、リンゴが果物鉢に盛られていることは、リンゴについて真であるといえます。このような意味での「事実」は、世界にとって、少なくとも物ないし対象と同じくらい重要なものです。

P.54⇒事実のない世界は存在しません。何も存在しないという事実がなければ、何も存在しないということ自体が存在しません。昼食に食べるものが何もないとすれば、これは一つの事実があるということ、状況によってとても腹立たしい事実があるということです。絶対的な無は存在しません。常に何らかのことが成立していて、つねに何らかについて何らかのことが真であるといえるのです。どんなひと、また何ものも、事実から逃れることはできません。全能の神であっても同じです。神であっても、事実から逃れることはできません。こうして話題になっているのが神であって無ではないということ、ともかくも一つの事実だからです。これに対して、物のない世界は容易に考えられます。夢の世界には、時間的・物質的な制約のもとで実在するものに似てはいますが、そのような物ではありません。もっとも、わたしたちが夢の中で自らの身体を抜け出し、実は宇宙の中を旅しているのだとすれば話は別ですが、そんなことはありそうにないと個人的には思います。

今のところ、わたしたちにわかっているのは、世界とは一つの全体をなす連関であるということ、また世界は対象やモノの総体であるだけでなく対象領域も存在しているということです。それゆえ、ここではさしあたり、こう定式化しておくことができるでしょう。世界とは、全ての領域の領域、すべての対象領域を包摂する対象領域である、と（これと違って宇宙は、自然科学の対象領域しか包摂していません）。また、さまざまな対象領域が数多く存在していること、さまざまな対象領域のなかには排除しあうものもあれば、様々な仕方で包摂しあうものもあることもわかっています。ヴィトゲンシュタインは、ここで分析を終えてしまいます。事実の総体が存在していて、それによって世界が定義される——・・・しかし・・・わたしたちにはわかっていることがあります。物・対象・事実だけでなく対象領域も存在しているということです。・・・こう定式化しておくことができるでしょう。世界とは、すべての領域の領域、すべての対象領域を包摂する対象領域である、と・・・また、さまざまな対象領域が数多く存在していること、さまざまな対象領域のなかには排除しあうものもあれば、様々な仕方で包摂しあうものもあることもわかっています。・・・

P.56⇒このようなわけですべての事実がたんに同等に並び立っているわけではありません。むしろ事実の地盤は、さまざまな対象領域に分けられています。必然的にそうなるほかないということは、後ほど見ることにしましょう。今この時点では少なくとも、数多くの対象領域が存在しているのは明らかだということ、これを確認しておけば十分です。事実の地盤にはさまざまな構造があり、さまざまな領域、さまざまな存在論的な限定領域に分けられるのだ、と。

⇒対象領域とは、本当に事実の地盤を区分した存在論的な限定領域なのか。つまり本当に現実おのものを区分した個々別々な領域なのか。・・・しかし現実そのものがこれらの領域に区分されていることを、私たちはどこから知るのか。様々な対象領域へと世界が区分されるというのは、本当

にたんなる話し方の問題以上のもの、言葉の綾以上のものなのか、と。(批判1)

P.57⇒こうして、現実だと思われていた数多くの対象領域が幻想であること、人間的な、あまりに人間的な投影物であることが明らかにされてきたのである。とすれば、どのような権利があって、現実それ自体が数多くの対象領域からできているなどと想定することができるのか。それは人間の認識欲求と誤謬の表現ではないのか。おそらく対象領域など存在しない。むしろ、様々な事実の総体だけが存在しているのだ。(批判2)

P.58⇒(反論)わたしたちも特定の条件の下では、私たち自身の世界像から何らかの対象領域を抹消する用意がなければならない、ということです。このような抹消を存在論的還元と呼びましょう。立派な対象領域と見えていたものか、じっさいには話の領域に過ぎなかった。客観的な対象と見えていたものが、じっさいには話の領域に過ぎなかった。このようなことが判明するときに、存在論的還元が行われます。

P.59⇒こうして近代では・・・多くの対象領域が実体のない話の領域、つまりは純然たる空談であることが判明し、それによって存在論的還元という概念が得られたのでした。「還元する」とは、文字通りに言い換えれば「帰す」ことです。・・・ですから、多くの対象領域にたいして誤謬の理論が必要となります。誤謬の理論とは、問題となる話の領域の体系的な誤謬を明らかにし、当の領域の本質を一連の誤った想定に帰するような説明方法です。存在論的還元が行われるにあたっては、自然科学であり、社会科学であり、実質のある学問的な認識が前提となります。

### 構築主義

P.60⇒ここに示されているのは、多様な対象領域のいっさいを、たやすく唯一の対象領域へと存在論的に還元することは出来ない、と言うことに他なりません。・・・一切を唯一の対象領域に還元しようと思うこと自体、あまりに功にはやった大胆にすぎる企てであり、現実の複雑さも、人間形式の複雑さも、まるで考慮していないと言わざるを得ません。いっさいを唯一のものへと存在論的に還元するのは、学問的とは言えない怠惰の表現でしかありません。

P.61⇒・・・このような洞察がニーチェの有名な言明の背後に潜んでいます。

いやまさに事実が存在せず、解釈だけが存在するのだ。我々は事実「それ自体を確認することはできない」・・・・・・・・

この引用に含まれている言明の大部分は間違っていますが、これによってニーチェが表現している考え方は、今日あらゆる学問分野に立派な代表者達を得ています。この考え方を「構築主義」と呼びましょう。既に本書の緒論で、この考え方とは別の立場を取ることを表明しておきました。私が構築主義と呼ぶのは、「我々は事実「それ自体」を確認することができない」のであり、むしろ事実それ自体を構築しているのだと想定する考え方です。(批判1)

P.63⇒構築主義者の考え方がとりわけはっきりと表れるのが、解釈を旨とする人文科学です。人文科学の対象は文化的産物であり、つまりは社会的・歴史的に成立して人間的構築物にほかなりません。・・・自然科学は、世界をあるがままの姿で認識する変わりに、世界モデルの構築に汲々としているにすぎない・・・(批判2)

P.65⇒私たちがおおよそ何かを認識しているとすれば、そこで私たちが認識しているのは事実には他ならない。ここで言う「事実」が、事実それ自体、つまり私たちがなしでも成立する事実であることも少なくありません。これに対して、今日広く流布している形態の構築主義は脳研究に訴えます。・・・

P.66⇒ニューロン構築主義を少し細かく見てみれば、そこにほとんど正しい点などないことがすぐに分かります。・・・どんな構築主義にも共通する根本的な間違いは、事実それ自体を認識するのは何ら難しいことではないと言うことを認識していないことです。・・・つまり、認識のプロセスの条件は、ほとんどの場合、認識される物の条件とは区別されると言うことです。(批判3)

### 哲学者と物理学者

P.69⇒いまや、世界とは何かという問いに答える十分な用意ができました。世界とは、物の総体でも事実の総体でもなく、存在イするすべての領域がその中に現れてくる領域のことです。存在するすべての領域は世界に含まれている。マルティン・ハイデガーが適切に定式化したように、世界とは「すべての領域の領域」にほかなりません。(あり程度評価)

P.70⇒イギリスの物理学者スティーヴン・W・ホーキングは——知識人としてはかなり過大評価されているように思いますが・・・世界——つまり、わたしたちを包摂している全体・総体・全体性——を宇宙と同一視しています。(批判1)

P.71⇒哲学がまだ十分に世界概念を展開していないことは、もちろん責められても仕方ありません。それという主哲学者が現代の自然科学に怖じ気づき委縮してしまったせいです。わたしたちと同時代の哲学者のなかでも、ユルゲン・ハーバマスです。ハーバマスは、多少の変更を施したうえでカントの世界概念を受け入れます。ごく手短かに要約してしまえば、カントが——またハーバマスが——言っているのは、世界とは「統制的理念」であるということです。とはつまり、わたしたちは世界全体という理念を前提せざるを得ないし、わたしたちの経験・認識するいっさいのものを世界全体の断片として了解するほかない、ということです。わたしたちがおよそ矛盾なく一貫した世界像をもちうることは、このようにして保障されます。世界それ自体は、一つの全体として統一されていることを表す。およそわたし達の表象しうるものは、その統一された全体の断片にほかならない、というわけです。そのさいい世界それ自体は、およそ断片を了解可能なものとしうるために前提されるほかはない理念だからです。ハーバマスは、このようなことをはっきりと「世界の形式的想定」と呼び、私達の行う世界認識の——最終的には常にコミュニケーション行為へと還元される——実践に結びつけています。

P.72⇒(引用)さまざまな言葉で語られるさまざまな「世界観」の「中間にある領域」としての現実への共通したまなざしは、およそ意味のある対話の必然的な前提である。意味のある対話を交わす者たちにとってみれば、現実という概念は「いっさいの認識可能な物の総体」という統制的理念に結びついている。

P.74⇒ハーバマスは別の個所では「対称の全体性」とも言っています。これが間違った世界概念であることは、すでに見ました。残念なことにハーバマスは、言語分析・言説分析というごく小さな領域だけを手いつ学のために確保し、それ以外の現実認識を自然科学と社会科学に甘んじてゆだねてしまいます。これをハーバマス自身は、「弱い自然主義」と呼んでいます。そのさいハーバマス自身の世界概念が掘り下げられ、その根拠が考えられることはありません。(批判2)

P.74⇒ホーキングが哲学を貶めているのは、哲学で問題になっているのが何なのかについて、ホーキングが適切なイメージをもっていないからです。一方でハーバマスがあまりに控えて慎重なのは、科学の研究成果に対して、ハーバマスが性急な異議を唱えたくないと思っているからです。しかし、これによってハーバマスは自然科学を過大評価し、自然科学に対して過剰な要求をしていますが。科学・啓蒙に賭けるというのは、確かに原則的には望ましいことに違いありません。だとしても、理由もなく哲学を貶めるべきではありません。ほかの学問とまったく同じように哲学もまた、進歩もすれば退歩もするものです。哲学による世界概念の改良は、哲学の大きな進歩にほかなりません。

本章で得られた重要な5つの結果を要約しておきましょう。

- 1 宇宙は物理学の対象領域である
- 2 対象領域は数多く存在している
- 3 宇宙は、数多くある対象領域の一つにすぎず(大きさの点で最も印象的な対象領域としても)、したがって存在論的な限定領域にほかならない。
- 4 多くの対象領域は、話の領域でもある。さらにいくつかの対象領域は、話の領域でしかない。
- 5 世界は、対象ないし物の総体でもなければ、事実の総体でもない。世界とは、全ての領域の領域にほかならない。

資料1 ポストモダン(英: postmodern)<sup>[1]</sup>、ポストモダニズム(英: postmodernism)とは、進歩主義や主体性を重んじる近代主義や啓蒙主義を批判し、そこから脱却しようとする思想運動のこと<sup>[1]</sup>。またはモダニズム(近代主義)に行き詰まりを見出し、そこから逃れようとする芸術などの文化的諸分野上の潮流<sup>[2]</sup>。脱近代主義<sup>[2]</sup>。(ウキペディア)

資料2 ポストモダニズムという語が用いられるようになったのは、チャールズ・ジェンクスの『ポスト・モダニズムの建築言語』(1977年)が最初であり、建築・デザインの分野で盛んに用いられた。ジャン＝フランソワ・リオタールが『ポスト・モダンの条件』(1979年)を著すと、フランス現代思想界に大きな影響を与え、その影響はアメリカを中心に広がりを見せ、やがて分野を超えて大きな時代の潮流を形成するに至った<sup>[3]</sup>。

建築においては、装飾を排して「禁欲的な四角い箱」とも評される機能主義・近代合理主義に基づくモダニズム建築に対する反動として現れた。多様性、装飾性、折衷性、過剰性などを特徴とする建築のことで、1980年代はポスト・モダンの時代であると盛んにいわれ、それらの手法を顕著に具現し内・外観を特徴づけられて多くが建設された。とくに日本では「バブル景気」とも呼ばれた好景気に支えられて、ふんだんな建設費を背景に様々な実験とも見られる建築デザインが試みられ、長期にわたる企画と工期を要求される建設事業においてはバブル崩壊後の1990年代にまでその後遺は及んだ。一般に、現代人が外見的看着て特異な印象をうけるその時代の建築物は、ポスト・モダンの影響を受けたデザインのものであることが多い。

当初、「ポスト・モダニズム」という言葉も使われたが、「イズム(-ism)」とするほどの方法論構築もかなわず、のちには「ポスト・モダン」として定着し、単なる流行現象として扱われ、現在では余り用いられることはない。元来は近代建築の合理的画一性や単調さに対する反省や批判からおこった建築スタイルではあるが、あまりの過剰性・奇異性などのあおりを受けて次の時代への可能性に至らず、模索の範囲に留まった一過的な建築表現として片付けられようとしている。一部には近代直前のアール・デコやアール・ヌーボー様式などの装飾性への参照も見られたり、あるいは脱構築主義建築のように破壊的な挑戦もあったが、建築の商業的ファッション性やセンセーショナルリズムの枠の中だけに留められ、外観や内装の表面的な部分だけが情報化の渦に飲み込まれてしまっている。また、この時代の洗礼を受けた当時の若手が中堅設計家となった現代に至っては、次代の明確なデザイン理論を模索する途上で、設計の場面あるいは実際に竣工した建築において「ポスト・モダン」の影響を受けた傾向もしばしば見られる。

ポスト・モダンのプロダクト・デザインには、イタリアのデザイン集団「メンフィス」(Memphis)がある。デザイナーのエットレ・ソットサスを中心に1981年に結成され、当初はミケーレ・デルルッキらイタリア人で構成され、後にインターナショナルになった。独自の形態、明るい色彩に特徴があり、家具・生活用品などにその無国籍なデザインと才能が評価され、世界的に知名度が高まった。好景気に沸いた1980年代の東京には世界中からポスト・モダンデザインの建築物やインテリア、什器などの商品が押し寄せ、溢れた。

## 哲学・思想[編集]

フランスを中心に興った思想で、多かれ少なかれドイツ圏のニーチェ、フロイト、ハイデggerらの思想を源泉とし、近代的な「主体」概念に対して構造主義によって提起された批判が背景にある。構造主義以後に構造主義を批判しつつ継承して出てきた思想傾向をポスト構造主義と呼ぶが、ポストモダニズムはポスト構造主義を下位概念として含む<sup>[4]</sup>。

フランス現代思想の文脈では、サルトルは、その著書『弁証法的理性批判』(1960年)において、実存主義をマルクス主義の内部に包摂することによって、史的唯物論を再構成し、ヘーゲル-マルクスの歴史的歴史主義とデカルト-フッサールの人間主義との統合を主張していた時代であったが、

構造主義は、無意識的・潜在的な構造的規定要因によって主体そのものやその判断およびその可能な選択肢が構成され、あるいは少なくとも制約されているとして、マルクスの上部構造/下部構造、生産力/生産関係といった構造的な諸概念が実体化されていること、また、デカルト - フッサールの近代的な主体を思想の前提として実体視していることを批判していた<sup>6)</sup>。

構造主義の祖とされるソシュール自身は構造という用語を用いておらず、自身の理論を言語学以外の分野に拡張することにも慎重であったが、クロード・レヴィ＝ストロースは、これを人類学に応用し、近代的な知と異なる野生の思考があることを示したのであった。サルトルの実存主義は、レヴィ＝ストロースとの論争を通じて急速に衰退し、構造主義が勃興していった。構造主義によれば、現象の背後にある構造を分析することによって、あるシステムの内的文法をとりだすことができ、各システムはそれにしたがって作用する。そこでは、あらゆるものが予想可能になり、偶然性や創造性といったものが排除されてしまうのである。いわゆるポスト構造主義の論者とされる者たちは、構造主義のもつ、構造を静的で普遍的なものとし、差異を排除する傾向に対して、それは西洋中心のロゴス中心主義であるとして異議を申し立てたのである。

そのような状況下において、『ポスト・モダンの条件』(1979年)を著したリオタールによれば、「ポストモダンとは大きな物語の終焉」なのであった。「ヘーゲル的なイデオロギー闘争の歴史が終わる」と言ったコジュエヴの強い影響を受けた考え方である。例えばマルクス主義のような壮大なイデオロギーの体系(大きな物語)は終わり、高度情報化社会においてはメディアによる記号・象徴の大量消費が行われる、とされた。この考え方に沿えば、「ポストモダン」とは、民主主義と科学技術の発達による一つの帰結と言える、ということだった。

このような文脈における大きな物語、近代＝モダンに特有の、あるいは少なくともそこにおいて顕著なものとなったものとして批判的に俎上に挙げられたものとしては、自立的な理性的主体という理念、整合的で網羅的な体系性、その等質的な還元主義的な要素、道具的理性による世界の抽象的な客体化、中心・周縁といった一面的な階層化など、合理的でヒエラルキー的な思考の態度に対する再考を中心としつつも、重点は論者によってさまざまであった。したがって、ポスト・モダニズムの内容も論者や文脈によってそうとう異なり、明確な定義はないといつてよいが、それは近代的な主体を可能とした知、理性、ロゴスといった西洋に伝統的な概念に対する異議を含む、懐疑主義的、反基礎づけ主義的な思想ないし政治的運動というおおまかな特徴をもつということが出来る<sup>6)</sup>。

資料3 形而上学(けいじじょうがく、希: μεταφυσικά、羅: Metaphysica、英: Metaphysics、仏: métaphysique、独: Metaphysik)は、感覚ないし経験を超越して世界を真実とし、その世界の普遍的な原理について理性的な思惟によって認識しようとする学問ないし哲学の一分野である<sup>1)</sup>。世界の根本的な成り立ちの理由(世界の根本原因)や、物や人間の存在の理由や意味など、見たり確かめたりできないものについて考える<sup>2)</sup>。対立する用語は唯物論である<sup>3)</sup>。他に、実証主義や不可知論の立場から見て、客観的実在やその認識可能性を認める立場<sup>4)</sup>や、ヘーゲル・マルクス主義の立場から見て弁証法を用いない形式的な思考方法のこと<sup>5)</sup>。

形而上学は、哲学の伝統的領域の一つとして位置づけられる研究で、歴史的には、アリストテレスが「第一哲学」(希: η πρώτη φιλοσοφία)と呼んだ学問に起源を有し、「第二哲学」は自然哲学、今日でいうところの自然科学を指していた。

形而上学における主題の中でも最も中心的な主題に存在(existence)の概念があるが、これは、アリストテレスが第二哲学である自然哲学を個々の具体的な存在者についての原因を解明するものであるのに対し、第一哲学を存在全般の究極的な原因である普遍的な原理を解明するものであるとしたことに由来する。そして存在をめぐる四つの意味を検討してから存在の研究は実体(substance)の研究であると見なして考察した。アリストテレスの研究成果は中世のスコラ哲学における普遍論争の議論へと引き継がれることに